

無駄をそぎ落とす

夫 明美

近年「ミニマリスト」という言葉や「モノを持たない暮らし」という言葉をよく耳にします。実際、「フランス人は 10 着しか服をもたない」というタイトルの本はベストセラーのラインナップに入っており、第 2 弾も発行されました。著者も 2015 年末からお正月準備の節目に「大掃除」と称して、10 数年詰め込んだままだった本棚や、何となくスッキリしないパントリーから、不用品と無駄に思えたモノを一気に処分しました。新しく生まれたスペースには「もう unnecessary のものは買わないし、むやみにスペースを埋めないぞ！」と意気込んで、達成感を味わったつもりです。本稿では不用品＝無駄というところから少し離れて、物事を突き詰めた後に生まれる「余裕」について記したいと思います。

先月「シネマ歌舞伎」で故中村勘三郎氏と故坂東三津五郎氏が主演を務めた「棒しばり」を鑑賞してきました。このお話は狂言をベースにしたもので、あらすじはこのようなものです。自身が留守の間に、しょっちゅう酒を盗み飲みする太郎冠者と次郎冠者に手をやいた主人は、次郎冠者棒で縛り、太郎冠者を後ろ手に縛り、安堵して出かけます。何とかして蔵にある酒を飲もうと画策する兩人、首尾よく酌み交わして、興にのって舞い踊るところに主人が戻ってきて…という非常に賑やかで面白みのある物語です。

見どころの一つは、手の自由を奪われた太郎冠者と次郎冠者兩人が舞を披露しあい、盛り上がったところで共に舞う「連れ舞い」をすることです。腕・手の動きが制限されたままで踊り舞うのは、踊り手に卓越した技能がないと魅力が伝わりません。今回主演を務めたお二人は同年代で、それぞれに踊りの名手として知られています。映画パンフレット内に引用されている三津五郎氏の談話によると、20 代、30 代の頃は「あいつがここまでやるなら、俺はここまでやってやろうと張り合っているところがありました」というライバル心を燃やしていたそうです。時を経て 40 代になって心境の変化があり、「どっちが主導権を取るかというのはなく二人で一つの物を作る、どちらが欠けても駄目だということをお互いを感じます。僕には彼（勘三郎）がいて、彼には僕がいる。その幸せを感じました。」とあります。

「負けたくない」という気持ちからエネルギーが発生し、個が全力を出し切ることにフォーカスする時期から、全体の中のそれぞれの役割や、周りからより良いものを引き出すことにも目配りや気配りしながら「共に作り上げる」過程への移行。それを演者自身の肉体を使った芸術（残念ながら絵画や彫刻のように「カタチ」としては残りません）と言葉で示しているように思えます。「余裕はいきなり出てくるものではありません。一所懸命にやり、無茶もし、全部そぎ落とされた時に初めてでてくるものです。」ともあります。その余裕から、観客はストーリーの面白

みやキレの良い踊りを満喫することができます。主役を務めたお二人を故人と呼ぶことを改めて淋しく思うと共に、肉体や精神を削って舞台を作り上げる情熱に胸を打たれる思いでした。

(ふ・あけみ/本学准教授)
